異世界で暴れる男の娘

咲亜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界で暴れる男の娘

【Ｎコード】
Ｎ５５７８Ｚ

【作者名】
咲亜

【あらすじ】
クリスマスの日、ココアを飲んで気が付いたら異世界だった。主人公は年齢＝彼女いない歴で運動苦手の引き篭り。そんな主人公が異世界で暴れる予定の物語。☆★☆★☆★この作品はチート、男の娘、文才皆無、ｅｔｃです
☆★☆★☆★完走できるかわかりませんが完走目指します

1話　異世界乱入（前書き）

はじめまして咲亜です。

この作品は作者が異世界に行ってあれこれする作品を読んでて書いてみたくなったので書いた作品です。

文才なし、完走できるか不明ですがそれでも読んでやってもいいという読者様がいれば読んでいただけるとうれしいです。

それと今までほとんど感想が来たことはないですが、感想で「ゴミ以下」や「駄作」、などのきつい言葉は遠慮下さい。作者は打たれ弱いのでお願いします。

1話　異世界乱入

はじめまして、私の名前は遠坂咲亜（とおさかさくあ）、高校一年の１５歳の男です。私は高校生になってバイトを始めたんです。このバイト割と時給がいいんです。そして今そのバイト先に向かってる途中です。

周りには３～４階程度のビルが立ち並び、人や車がたくさん蠢いています。そして空から白くて小さいものが降っています。足元には降り積もった雪が足首が隠れるくらい積もってます。

普段ならここまで人や車は多くないんですが今日はクリスマスです。リア充の人は彼氏や彼女ときゃっきゃっと楽しむ日です。しかし私は彼女なんて生まれて一回も出来たことないのです。女友達すらいません。男友達すらすくないです。なので私はクリスマスなんてただの寒い日常です。ただの寒い日常なのでバイトはせずに家に引き篭りたかったのですが、店長に時給ＵＰという餌を見せられクリスマスにバイトすることになりました。

「はぁ・・・・さむ・・・・」

今年一番の寒さです。はやく家に帰ってのんびりしたいです。バイト休めばよかったかな・・・

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「ふぅ・・・つかれました・・・」

やっとバイト終わりました。私は家に帰ると早速暖房をいれ、こた

つの電源をいれ、テレビを付け、ココアを準備してこたつに入りました。

「ココア最高・・・」

ココアを飲むと落ち着きます。

落ち着くとなぜか眠くなってきました。ああ・・・すこし寝ましょうか・・・

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

目が覚めると周りには木、木、木、木、湖、木、木です。あれ・・・私コタツでココア飲んで・・・それから・・・えーと・・・たしか・・・眠くなって・・・気がついたら周りは森??

「え?森??」

周りは木ばかりなんですがある方向だけ木と木の隙間から違う風景が見えました。ということはここは森の端っことということになります。とりあえず森に入るより森の外が気になるので森の外に出ようと思います。

あれ・・なぜかとても暖かいです。私がいたところは冬だったはずです。これはどういうことなんでしょうか??

あ、これって転生とか憑依とか二次創作で流行りのもの?!でも、こたつで眠っただけだし、家の中なら死んだりしないはず・・?それに神様にもあってないし・・・チートと呼ばれる反則の能力もも

らってない・・・

まず、転生と憑依は違うとして、考えられるのが、私がいた世界の違う場所に転移したか、異世界に転移？したかかな。うーん、この場合はど・・・「と、盗賊だぁあああああ」盗賊？？となると異世界ですかね。さて、盗賊はどうしましょうか。今の私では勝てる要素が何もありません。異世界に来たのなら魔法とか使えるんでしょうか？今は時間ないのでいつか試してみましょう。

盗賊ですが、
・戦う
・にげる
・その他

だいたいこれくらいですね。まず3つ目のその他は1つ目と2つ目以外思いつかないので選択からのぞきます。2つめのにげるですが、もし盗賊に見つかれば逃げ切れるでしょうか？私はこの世界に来る前の世界では引き篭りだったので運動は苦手なんです。そうなると1つめの戦うも「おい、こんなところに女がいんぞ、捕まえろ！」え、女？？私の周りには私以外盗賊しかいません。となると女とは私のことでしょうか？？でも・・「ほぉ、なかなかの上玉だな、こりゃあ高く売れるぜ。おっと、その前にヤっとくか。こんなやつはなかなかいねぇだろうしな」・・・やばいです。いろんな意味でやばいです。幸い盗賊はまだ一人、さっき叫んでいたので時間が経つと増えるはず、そうなる前にどうかしないと・・・

まず戦うというのは無理そうです。盗賊は素材はわかりませんが剣を持っており、皮で作ったような鎧を来ています。それに比べ私は何も持ってません。

次にげるというのは・・・これしかないようです。善は急げです。私は立ち上がり盗賊がいる方向とは反対側、つまり森の奥に向かって走り出しました・・・あ・・・なにかに躓いてこけてしまいました。

「あ、ああ・・・」

怖くて声が震えてしまいました。そして私はなぜか躓いたところを見ていました。するとそこには――――――

1話　異世界乱入（後書き）

誤字、脱字、その他ありましたら報告お願い致します。

2話　初戦闘（前書き）

1話の最後のところをすこしいじりました。具体的には最後の一行がなくなっただけです。

以上です。

2話　初戦闘

私は躓いたものを見ました。そこには――――――

え？これって・・・あの呂布が持ってた奉天画戟？？でも呂布が持っていた奉天画戟ってこんなに大きかったかな・・・大きさはだいたい私の身長の1，5倍くらいの大きさです。

あれ、私思ったより落ち着いてませんか？？どうしてなんでしょう、この呂布の持っていた気がする奉天画戟を見た瞬間から恐怖感というんでしょうか？そういう感じがなくなりました。

どうして奉天画戟を見ただけで落ち着いたんでしょうか、たとえ武器があったとしても私は前世では運動苦手の引き篭りでした。そんな私が自分の身長の1，5倍くらいある武器をもって振ることができると思いますか？？答えは否です。いえ、こんな世界に来たり、不自然な感じで私のそばに武器があったんです。ならばこの武器は私が使うために2次創作で「転生させてやろう」とか言う神様みたいな人が容易してくれたんだと思うのですが、みなさんはどう思いますか？？もしそうならば身体能力もこの武器が持てる程度にはあるはずです。

あ、そういえば私今盗賊に襲われていたんでした。とにかくこの奉天画戟みたいな武器を持ってみましょうか。

――――――軽い

「嬢ちゃん、ぶ、武器なんてもってどうしようってたんだ？」

すこし怯えてますね。

「いきます」

私は一言呟き盗賊に向かって走る。私と盗賊との距離はおよそ７ｍ、私は盗賊が剣を構える前に両手で持った奉天画戟を振りかぶり、そのまま一直線に振り下ろしました。

――――――ビシャッ

・・・私はてっきり武器が振れる程度の身体能力だと思ったんですが、予想外でした。私が思ったよりも身体能力があったみたいで盗賊を頭からまっぷたつに斬っちゃいました。

それよりも今気がついたのですが盗賊の人私より４０ｃｍくらい身長が高かったです。私は前世で１８０ｃｍくらいだったんですけど、そう考えるとこの盗賊の人は２２０ｃｍくらいですか。

大きくないですか?!それによく見るとまわりの木も大きい気がします。

――――――あ、もしや体が縮んだんでしょうか?

それならば納得です。もしそうなら私は盗賊の人より４０ｃｍ程度低いことになります。盗賊の人が平均の身長だと考えると、１４０ｃｍくらいでしょうか??結構ちぢ――――――

――――あっ!他の盗賊の人がまだいたはずです。

今の能力とこの奉天画戟があれば盗賊を倒すことも出来るはずです。

さて、レッツ盗賊退治です。

私は盗賊が来た方向に向かって走りました。

★★★★★★★★★★

「あ、村発見」

やっと村を見つけました。なんで村を探してたかですか？そうれはですね、盗賊は村を襲っていたのでは？と思ったからです。

村が近づくにつれ血の臭いが濃ゆくなってます。いそいだほうがよさそうですね。

村の家は数が５０くらい、見た目はファンタジーの世界と似た感じです。そして村の通りには村人だと思われる人の死体がありました。死体には剣で切り裂かれたようなものや、弓で殺されたものや、・・・これは・・・魔法？でしょうか、死体の心臓の部分に氷が刺さってました。そして刺さった部分の周りがすこしだけ凍ってました。

村の中心くらいに行くと盗賊が１０人程度いました。その中で唯一ほかの人とは違う装備をしている人が私に気づき話しかけてきました。

「おっ、おい、お前らちゃんと村調べたのか？まだ残ってたじゃねぇか。こんないいもん見逃すところだったぜ」

「ち、ちゃんと調べました！」

村の人の敵をとりましょうか。

私は奉天画戟を構え盗賊に向けて言い放つ

「村人の仇！！」

私は奉天画戟を構えたまま走り一番近くにいた盗賊を横に薙ぎり、まっぷたつにし、そのまま二人目も同じように殺しました。

「嬢ちゃん覚悟できてんだろうなぁ？！」

「よくもバンとジミーをやってくれたな！」

・・・私が殺した盗賊の名前はバンとジミーですか、なんか微妙な名前ですね。

「あなたたちは私が殺します」

今の私なら全員殺すことができるはず。

「ふんっ、やれるならやってみな！お前らやるぞ！！」

リーダーらしき人がそういうとほかの人たちが武器を抜きかまえました。

私は一番近くにいる槍をもったひとに向かって走りだ・・・・

「・・・っ、・・・・うっ・・・・」

私は頭にきた痛みに耐えながら後ろを向くとそこには盗賊がいました。

しくじりました。まさかほかにも盗賊がいたとは・・・うっ・・・・

このまま・・では・・いし・・き・が・・・・

2話　初戦闘（後書き）

主人公は負けましたがチートです。

このあとから暴れる予定？です。

これからもよろしくお願いします

３話　主人公の値段は金貨１枚と銀貨３０枚？！（前書き）

今回から、もしくは今回だけ書き方を変えてみようと思います

3話　主人公の値段は金貨1枚と銀貨３０枚?！

明りがないと髪の色がわからないくらい暗く、石に囲まれた部屋の中、二人の人間がいた。

その二人の人間は今、この世界でいう奴隷市場と呼ばれる場所の奴隷が入る場所にいる。この奴隷が入る場所は牢屋といっても過言ではない。なぜならば周りはほぼ石で囲まれ、囲まれていないところは鉄格子でふさがれている。そして部屋・・・牢屋の中にはしきりもなく、ぽつんと洋式のトイレが置かれている。部屋のおくには軽く藁をしいただけの簡易ベッドがある。そのベッドに一人の人間が寝ている。その人間を眺めるようにして壁にもたれかかって座っているもう一人の人間がいた。

二人の人間はなぜか服を着ておらず全裸の状態だった。そしてその二人の人間の首には首輪が付けられていた。

「・・・ぅ、・・・んん・・・」

（あれ・・・私はどうしてこんなところにいたんでしょうか・・・それに・・この場所は・・牢屋??そういえば、私は確か、盗賊にやられて気を失って・・・・・）

「あっ、目が覚めましたか??」

（っ!!!は、はだか?!?・・・ここが普通の牢屋ならばはだかのはずがない・・・）

「は、はい。まだすこしあれですけど・・・あの、ここはどこですか??」

「ここはメルハンダ王国にある奴隷市場のまだ買い取り手がない奴隷が入れられるところです。」

（メルハンダ王国??それに奴隷市場!?）

「え、ええとそうなるとあなたと私は奴隷ってことですよね??」

そう、彼女が言っていることが本当ならば二人は奴隷ということになる。サクアは目が覚めていきなり奴隷という言葉を聞きとても驚いていた。

「はい、この首にある首輪が奴隷の証です。そしてこの首輪を取ると死ぬそうです。あっ、私の名前はクシナといいます。気軽にクーと呼んでください」

（今気がついたけどクシナさん・・・クーさんとっても可愛い・・・それに・・・・）

クシナはサクアよりも２０ｃｍ程度身長が高く、髪の色はどんなものでも反射しそうなきれいな銀色の腰まで届くストレート、瞳は蒼く透き通っており、サクアの前世で見たどの人よりもきれいで可愛かった。そして今クシナとサクアは裸である。なので彼女の体はすべて見えてしまっている。

（胸で、でかい・・・・・はっ、はやく答えなければ・・・）

「私はサクアといいます。よろしくお願いします?なのかな」

「こちらこそよろしくお願いします。それにしてもこんなに可愛い

女の子がいたなんてと思ってたんですが、サクアさん男の子なんですね。」

（???可愛い??そんなはずは・・・私は前世は普通の男だったはずなんですが・・・）

「私は普通の男だと思うんですが??」

「普通じゃないと思いますよ??だって――――「おい、お前ら二人そとにでろ。」」

クシナがしゃべっていると途中で奴隷市場で働いている人らしき人物がやってきた。その人間は茶色いボサボサの頭をしていた。その人間は皮で作ったと思われる軽鎧を身につけ、腰には片手剣がぶら下がっている。

「おい、でろって言ってんのが聞こえねえのかぁ！」

軽鎧を身に付けた男がそういうとクシナはなにも言わず立ち上がり外に出るため歩き出した。サクアは立ち上がったクシナを見てサクアも立ち上がり歩き出した。

（さすがに素手では武器を持った相手には勝てませんね・・・あの奉天画戟があれば勝てると思うんですが・・・ぅ、い、今なにかが・・・。とりあえずここからどうやって逃げるか考えないといけませんね。しかし、私たちが呼ばれた理由というのが、すでに買われて連れて行かれるというのは嫌ですね。奴隷を買う人間にいい人はいないと思いますし・・・）

サクアとクシナの目の前にはさっきとはまるで違う豪華なといってもいいような扉がある。その扉はカラフルに装飾されていた。二人を連れてきた人間はその扉を開け中にいる人間に話しかける。

「ダイト様！奴隷を参りました！」

部屋の中にいた人間――――――ダイトと呼ばれる丸々と豚みたいに太り、高そうなものばかりを身に付けた人間は、下っ端が連れてきた二人を足先から頭のてっぺんまでくまなく眺めていた。

「やはり、見れば見るほどこれは2匹ともなかなかのものだな。とくにこの金髪で目の色が蒼と翠の方は女ならばわしのものにしておったのだがな」

（・・・奴隷が服を着ていないのはこのダイトと呼ばれてる人（豚）の趣味なんでしょうか??それに今ならこの下っ端さえ倒せれば逃げれるはず・・・あっ、この首輪はどうなんでしょうか・・・しかし・・だれかに買われ奴隷になるならば、戦ってすこしでも逃げれる可能性がある方を選びたいですね。）

「失礼します！奴隷をつれて参りました！」

再び扉が開き中に入ってきたのは紅く、オレンジの中間の色をした髪で４０代くらいと思われる男だった。その男も奴隷であるためはだかであった。

ダイトは新しく入ってきた男の奴隷を少しだけ見てすぐに見るのをやめた。

「よし、決まったぞ。まず銀髪の女は銀７０枚。そして金髪のやつは金１枚と銀３０枚。その紅い男は銀３８枚だ。おい、ナズこいつらを連れて行け」

ダイトは奴隷３人に値段をつけるとナズと呼ばれた下っ端に連れて行くように命令した。
ナズは３人を連れて部屋を出て、先ほどとは違う牢屋に３人まとめて入れられた。

「ふぅ・・・俺はグランだ。」

牢屋に入れられると紅い男は名乗ってきた。

「私はクシナといいます。よろしくおねがいします」

「私はサクアといいます。よろしくお願いします」

（思ったけどさっきの牢屋と比べて今いるところはベッドも４つある。それにトイレも一応仕切りもありますね。トイレに仕切りがあるのはうれしいですね・・って私はなにを・・・）

「さっそくなんだが俺はここを脱出しようと思っている。」

「「えっ！？」」

サクアとクシナは同時に驚いた。しかし二人はそれぞれ違う意味で驚いていた。サクアは自分と同じことを考えていたことに驚き、ク

シナは脱出するということに驚いていた。

「まだ方法はきまってないが、なるべく早く脱出したい。一度買われて契約してしまうと買ったやつに逆らえなくなるからな。そうなればもうどうしようもない。だから早く脱出したいんだが、君たちはなにかいい方法は思いつかないか？？」

グランはそういうと、うぅ～んと考え込み。クシナはまだ驚いているようだ。

（脱出する方法・・・奉天画戟があればこの檻も壊せると思うのですが、・・・っ？？また、なにかが・・・）

「武器があればたぶん出れると思うのですが、もしでれたとしてもこのまま外にはでれないんですよね。ここって服とか置いてなさそうなんですけどどうなんでしょう・・・」

「たしかに外に出ることができてもこのままなら確実に国の兵士に捕まえられるな。」

（どうにかして武器を手に・・・こ、これは・・・）

「どうしましょう・・・やはり脱出するのは無理だとおもうのですが？」

「いや、できるかもしれません。グランさん、クシナさん一緒に脱出しませんか？？」

「「！！！」」

「二人とも耳を貸してくれませんか??」

「あ、ああ」

「は、はい」

「えっとですね・・・ごにょごにょ・・・ごにょごにょ・・・」

サクアはクシナとグランにこれから行うことを説明した。クシナとグランはそれを聞き、クシナとグランは微笑んでいた。

しばらくして、3人は立ち上がる。そして脱出するため動き出す。

「はじめます。」

3話　主人公の値段は金貨1枚と銀貨３０枚?！（後書き）

日本語の使い方がおかしいかもしれません・・・><

それとこの書き方ははじめてでした。どっちの書き方のほうが読みやすいですか??よければ教えていただけると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5578z/

異世界で暴れる男の娘

2011年12月20日20時49分発行